論説

平和は人類永遠の課題

一凶を禁ずる仏子のつとめ

「人類の和合と前進」を掲げた史上最大の平和の祭典、第二十四回ソウル五輪大会が世界の注目を集めたのは、躍進する韓国での開催ということもさることながら、過去、モスクワ・ロス両大会が、東西両陣営によるボイコット合戦によって、政治的道具に利用され、五輪憲章も空しいものと化し、五輪そのもののあり方が問われようとしていた中、今度もまた、両陣営の激突する朝鮮半島という、政治的緊張の地での開催ということで、〝もしかすると再び〟という危惧の念を世界の人々が懐いていたからである。

《《《現実と理想の落差》》》

大会そのものは大成功であった。だが表面の華やかさと裏腹に、日本海には米軍の第七艦隊が北朝鮮にニラミをきかせ、韓国内では軍の出動による厳戒体制の中、テロの影に脅えながらの大会であった。一見平和なソウル五輪も、一皮むけば虚々実々の国家間の駆け引きが繰り広げられ、相も変らず政治の具でしかなかったし、平和の祭典中にも、世界のあちこちで二十五の戦争が進行中という現実をまざまざと見せつけてもくれたのである。

現在、宗教教団の多くが世界平和を唱え、さまざまな活動を展開している。中でも創価学会等の新興教団が特に熱心であるが、残念ながら、いずれも自己宣伝のために国連を利用し、平和の二字を利用しているに過ぎないことは、すでに指摘されている通りである。他の教団にあっても大同小異である。いずれにせよ宗教教団がこれほど平和を叫ぶのは驚きであり、「平和」が各教団の名利のためにここまで利用される時代もめずらしい。

人類の願いである世界平和、その象徴である五輪大会が、常に政治に利用され続けた歴史であったように、人類の理想と現実との間には、常に大きな落差が存在する。このことは戦後四十数年間、常に核戦争の危機にさらされながらも、辛うじて回避できたのは決して平和運動によるものではなく、米ソの力の均衡によるところであったという現実を見れば理解できるのである。

だからといって、理想を掲げた平和運動のすべてを否定するものではないが、現実を忘れ、口に平和を唱えれば平和がやって来るような、平和を口にするものはすべて正しいというような錯覚をしてはならないと思うのである。

《《《心に平和の砦を》》》

戦争と平和は人類永遠の課題である。なぜなら、それは本来人間の心の中にあるものだからである。そうであれば、ただ声高に平和を叫ぶよりも、一人一人の心に平和の砦を築く作業こそ宗教本来の使命であろう。まやかしの平和運動に目を奪われてはならない。

日蓮大聖人は「立正安国論」に、

「彼の万祈を修せんよりは、此の一凶を禁ぜんには」

と、すでに七百年前、根本的な平和の方途を示されている。

正信覚醒運動――それは一凶たる謗法を禁ぜんための、仏子としての努めであると同時に、崇高なる平和への一歩であることを銘記し、さらなる精進を誓い合おう。

読者のひろば

短歌俳句

○小さき実の紫式部艶やかに秋草の庭に輝いてをり
○運動会マーチの曲も軽やかに子等の喚声秋空わたる
（鳥取・長谷川澄子）
○秋雨の降り続く夜軒先に止むなくすだく虫の音哀れ
○なき母と妻が手植し栗の実を茹で偲びつつ御仏に供養す
（岐阜・百田喜久雄）
○朝焼けの空を映して北池に聳立ちこめる山の静けさ
（和歌山・土井百合子）

☆

○道の端の毬開かれて試し椀ぎ
○観月に髭茫茫のすすきかな
○狐からだまされそうな大花野
（埼玉・樺山世雄）
同
○露草に露の力のうごきをり
○秋霖の夜半や不眠の眼を閉じて
（福岡・立石夕里女）
○大やんま轡かれし屍や秋暑し
同
○かしこまることなき妻と秋刀魚喰う
（三重・泉要子）
○コスモスの零るるばかり道白し
（鳥取・長谷川澄子）
○葛の花野の日と別れしほれけり
（新潟・椛沢みつぎ）

☆

折伏と信仰の確立

茨城　辻　妙子（要蔵寺　女子）

今年の夏の研修会では、自分と同世代の方々が何人かお話をして下さいました。その中で「親の信心についていくのではなく、自分の信心について考えよう」ということを話された方がおりました。

私はこの言葉に深く感銘しました。私ぐらいの年になると、親にも一人前の大人として見てほしいと思うのに、信心は親のあとについているだけ、では情けないことです。

これからは、自分の信仰について今まで以上に勉強し、知識を深め、信心を確立していきたいと思っております。

さて、私は現在、どうしても折伏したいと思う友人がいます。以前は、信心のことを友人に話すのを恥かしく思っていました。今の若い人の中で信仰をもっている人は少なく、また信仰する人を変わった人間のようにいう人が多いからです。

友人に変に思われたくないと思って信心の話などをしたことがなかった私は、今では友人を折伏したいと思い、少しずつ話をしています。まだまだ勉強不足で、話につまってしまうこともたびたびですが、そのたびにもっと勉強しなくてはと思います。

私の所属するお寺では、月に一度、青年部の勉強会が開かれ、毎月必ず参加するようにしています。またそれ以外にも書物などを読みたいと思っています。

現在の私の目標は、自分自身の信心の確立と、友人を必ず折伏するという二つです。友人の折伏は大変で、長い時間がかかると思います。しかしそうすることが信仰の確立につながると考え、頑張ろうと思います。

寺院参詣の帰途に

和歌山　土井　百合子（妙海寺　婦人）

きょうは勉強会。娘にお寺まで送ってもらいました。ところがご住職が出てこられ、「きょうは何もないですよ」とおっしゃる。「あれ、勉強会と違いますか」「勉強会は明日ですよ」といわれて自分の勘違いに気がつきました。

「須弥山に近づく鳥は金色に輝くそうですから、一度でも多く参詣でき、ありがたいですね」などとご住職としばしお話をしました。帰りには足の不自由な私をいたわってタクシーを呼び、階段の下まで送って下さいました。

車に乗ると運転手に「奥さん、創価学会ですか」と尋ねられました。そこで私は、学会を脱会して法華講になったこと、妙海寺は法華講のお寺であることなど説明するとともに、日蓮正宗の御本尊は最高に尊いこと、そして創価学会の非宗教的、反社会的体質や、正しい信心のあり方を訴えました。

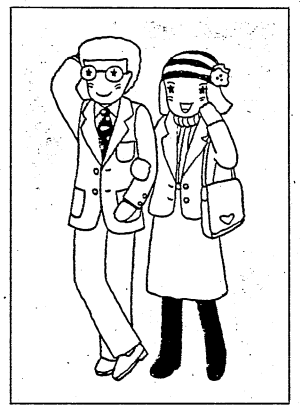
運転手は驚いた様子で、学会に対する認識を新たにしたと喜んでいました。

お寺に参詣したおかげで、一面識もなかった人に信心の話ができ、ああ良かったと、御本尊様に感謝のお題目を上げました。

御書に縁する信心

大阪　高橋　政一（伝正院　壮年）

かつて御書を開くたびに、学会に都合のよい解釈で答案を書けば合格した教学試験等を想い出したことがありました。現在は正信に目覚め、学会流御書解釈の誤りを知り、徐々にではありますが大聖人が得られた生涯の確信、大慈悲に触発されることで得る感動が、自分の信仰を革新していくことになるとご住職より学びました。またこれが、御書に縁するということではないかと思うようになったのです。



御書の勉強というと一歩後退しがちですが、大聖人の仏法を信奉する者がこのような態度で良いのか、今一度初心にかえって学ばなければ真の正信の徒ではないと考えるようになりました。頭から法門がむずかしい、理解しにくいと勝手に決めてかかって学ぼうとしなかった自分を反省するのです。

いつだったか、ご住職より「いまさら御書を勉強しても、出来ると信じて努力するところが真に尊い」との御指導のもと、僧俗一体で頑張っています。

また、春と夏の年二回の研修会を聞正院支部と合同で盛大に開催しています。

月例の行事は第一日曜日

編集部日誌

▷今号の報道欄では、過日開催された全国教師講習会のもようを紹介しました。創価学会問題について講演を行ったジャーナリスト・溝口敦さんが、昭和47年に世に問うた『池田大作　権力者の構造』は、池田大作さんを実証的に批判することで創価学会問題の本質に迫った、同問題の教科書ともいうべき一書です。ちなみに、溝口さんには『血と抗争・山口組ドキュメント』なるコワそうな著書もあります。

▷新年号の企画がほぼ決まりました。16頁の増大号で、発行を山の頂点にたとえれば、やっと裾野を歩きはじめたばかり。月２回刊という制約があり、即報性という点では一歩後れをとる「継命」ですが、やはり新聞は新聞、企画は絶えず「変更」の風雨にさらされていますので、内容はもちろんあとのお楽しみ。ともかく仕事をします。

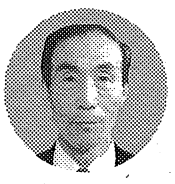
投稿規定

係では皆さんの投稿をお待ちしています。手記・主張、随想（六百字前後）をはじめ、短歌・俳句もお寄せ下さい。宛先は当社編集部「ひろば」係へ。掲載分には記念品を贈呈します。

北から南から　講中の活動報告　▷125◁

福岡県田川市　仏生山　無辺寺

全講員が折伏修行に



西村　健

「謗法を責めざれば師檀ともに無間地獄」との御聖訓と、「法華講の信心は折伏から」との師匠の御方針のままに、我が支部は折伏一途の修行であります。

各地区長が出した今年の折伏目標数に向って残された月に全力をあげて折伏にとりくんでいます。折伏や座談会に皆が師匠のお供をして「折伏が出来る出来ないということよりも、出来ると信じて努力するところが真に尊い」との御指導のもと、僧俗一体で頑張っています。

また、春と夏の年二回の研修会を聞正院支部と合同で盛大に開催しています。

月例の行事は第一日曜日お経日、十二日お逮夜、十三日お講、二十日折伏日（田川本部のみ）、月末本部座談会（飯塚本部のみ）、婦人部会、企画会、子供たちの若竹会、男女青年たちの大樹会や妙行会、そして師匠と共に二時間の唱題講と月末に「翌月の行事日程及び折伏状況について」の支部全役員会等であります。座談会が毎月三十ケ所で開かれているので勉強会はありません。

来年三月には無辺寺創立二十周年の佳き春を迎えるに当り、各人が今、法華講に与えられた「時の重さと使命の重さ」を互いに再確認しながら頑張っています。

正に今は時なり、時は今なりで、大聖人様の御法難の御一生を思い浮べて、我が支部も苦労をして各々が人格を作り、徳を積み人生の思い出の歴史と、我が支部の盤石の礎を作ろうと、全講員が師匠共々折伏の修行に歩いています。

交差点

▽天皇陛下のご容体が連日新聞やテレビで報道されています。戦後四十年以上を経て、少なくとも国内に安定の時代を迎えたといわれる現在、その是非はともかく人々は安定感の継続を望んでいます。昭和という時代がどこまでも続いてほしいと願うのは、庶民のあたりまえの気持なのでしょう。

にもかかわらず時代は変遷をしていきます。昭和はピリオドを打ち、新しい元号が制定され、あと数十年も経ったころには「彼は昭和生まれの古い人間だよ」なんて会話が交わされることにも……。もっとも、そのころにはまたレトロブームが復活して、古きをなつかしむ風潮が一世を風靡（ふうび）するかも知れません。

▽ソウル五輪が終了し、メダルを獲得した日本代表選手がしばしばテレビにゲストとして登場しています。勝利とともに青春を終えた人、敗退を余儀なくされ、次の世界選手権に狙いを定めて早くもトレーニングを開始した人、さまざまな〝人生劇場〟です。勝利のあとも敗退のあとも、身の処し方はむずかしいものです。そこに、人間のすべてがあらわれるのであれば、人生劇場の俳優も観客も、油断はできません。

▽街路樹のわくら葉をぬらしていた秋の長雨もやっと途切れ、待ち遠しかった太陽が東京に顔を出しました。朝の通勤電車にゆられる乗客の一人一人に陽は公平にさしますが、晴れ間に気づかない人もたくさんいます。（か）

グラフィティ
創価学会の現実
第２弾好評発売中（残部僅少）。創価学会の非宗教的な実態を数々の写真でつづり、その病める体質をあばく。お申し込みは〒101 千代田区西神田３－１－３ 矢島ビル２Ｆ　継命新聞社事務部（TEL03―234―4105）へ。